

ひと夏の体験

2021/08/25~08/30

スポーツの祭典オリンピック大会。2020東京大会が2021年7月25日から8月8日開催され飛び込み競技も女子シンクロナイズト競技を皮切りに競技が行われていった。5月のワールドカップで競技役員の仕事の内容はわかっていたが本番では全く違った仕事の内容であった。大会自体もコロナの関係で1年の延期をみるなかでの開催である。コロナ対策として、ワクチン接種があり2回にわたり東京まで行くことになった。1回目は赤羽にある味の素ナショナルトレーニングセンター「NTC」であり6月17日から19日、2回目は7月9日から17日、東京都庁45階北展望室ということであった。私がニュースで小池都知事がオリンピック関係者はワクチン接種を行うことを聞いてから、まさに次の日からの摂取であった。このスピード感が地方とは違った。米子市ではワクチンをどうするかの話合いがなされていた。しかも、交通費は向こうが持ってくれるということだ。とにかく大会が始まるまでに2回の接種を終えることができた。大会に招集されるのは7月19日からであった。仕事の関係で18日から夏休みに入るので3週間というロングランの日程でも行きやすかった。

役員の仕事はというとDWCの時とは違いドライランド、タワー、サブプール、ドライランドの人数制限コントロール、消毒その他である。DWCの時はダイバーが我先にという感じで非常に混雑したがオリンピックになると予選を通過したダイバーなので人数も前に比べてみて多くなく非常にやりやすかった。

でも非常に残念なことがあった。我々は国際審判員という肩書きを持って役員をしている役員の仕事があるときは仕方ないが仕事のないときプールサイドにいてはだめだというのだ。観客席にいてもだめだというのだ。とにかく居場所がなくなるのである。これはだめだと思って日本水泳連盟の伊藤正明氏、野村孝路氏、大久保一司氏などに訴えたが意見はどこまで通ったか、誰にまで伝えられたか定かではないが、国際審判員が高い意識を持って試合を見学することはできなかつた。これではだめだと思って、FINAのキャティ・シーハンさんに直訴まで考えたが実施しなかつた。名東さん、金戸さんも同じであったからだ。(でもTVには映っていたが)これがオリンピックか、これがFINAの考える大会か「いい加減にしろ」といいたい。私は毎日ホテルまで帰ってTVでオリンピック中継を凝視していた。ここら辺しか私の意地は表せなかつた。でも何もしないでFINAの役員ですって顔で試合を見られる人がいるとすれば笑ってしまうであろう。日本水泳連盟と国際水泳連盟と水と油ではないか。飛び込み競技発展のための行動も何もなしということである。国際審判員だけではない、若手のダイバーたちもである。これからの日本を担うであろう選手たちも最高の学習時間とはならなかつた。若手ダイバーたちには、ドライランド担当になっていたものをどんな練習をしているかなどプールコントロールに回ってもらい極力プール練習をみさせた。

そういう毎日をおくっていた。同級生の増岡啓彰も居場所がない日があり、2人してホテルに帰ってTV観戦をした。後日談だが、私は、8月16日から20日、長野インターハイで長野を訪れていた。先輩、同僚など気さくな仲間と夕食をともにしていた時だ、飛び込み委員長の野村氏から電話が入った。全中の役員で行っていた増岡が倒れたとの一報だ。倒れてから2時間ばかり経過していた。……

次の日、競技役員を集めて経過説明をして全員で黙とうを行った。急な知らせでショックを受けた。でも私以上にショックを受けているのは奥さんであろう。享年62歳。心不全。あまりにもあっけない死であった。



朝のオリンピックプール、誰もいない。そこには私と増岡の2人と数人であった。

「安永、ちょっと写真撮ろうよ。」という言葉に軽い気持ちで応じた。飛び込み台をバックにオリンピックマークも盛り込んだ写真……2人だけの記念写真だ。これが最後の写真になるなんて……。

定年後の話で何をしたい、かにをしたい。あの話は、いったい何だったのだ。コロナ禍で葬儀にも行けない。OB会事務局の方にはお世話になり、香典と同級生で供花をさせていただいた。順番がとれないらしくようやく8月29日に執り行われた。この日は、私の誕生日であった。誕生日にお別れか……これも何か因縁めいたものを感じる。

今までにこのような体験をした夏は過去にはない。人生2度目のオリンピック、初めての役員、友との別れ……合掌。